

オーストラリアの 多文化社会の成熟と 食の多様化

堤 純 つつみ じゅん / 筑波大学

人（約2400万人）よりも羊（約7000万頭）の数の方が多く、人口の大部分は南東部の海岸部に集まっており、農業や鉱物資源が豊富な資源輸出国である一方、工業やサービス業などの都市型の産業のイメージがあまりない。この国はいったいどんな特徴の国なのだろうか？



シドニー郊外のバンクスタウン（2015年9月、写真はすべて筆者撮影）。シドニーの南西約20kmに位置するバンクスタウンは、アラビア語を話す人々の増加が著しい地区である。他にも、ベトナム系をはじめとする東南アジア系の移民も多い。ここでは、店で売られている物から道行く人々の顔つきまで、CBD（中心業務地区）とは対照的である。

オーストラリアに通って

私のフィールドはオーストラリアである。かくも広いこの大陸の、具体的にどんなトピックスに関心があるのかと問われれば、「大陸全部」が答えである。現地に飛び込んで、研究対象の民族が暮らす集落に通って何年も参与観察を続けるような研究者や本誌のファンの読者からすれば、大陸全部が対象などというのはいささか「ばかげた」ことに聞こえるかも知れない。しかし、冒頭に書いたように、オーストラリアは実態がよくわからない国の一つなのではないだろうか。そんな不思議な部分に私は惹かれている。

私がオーストラリアを本格的に調べ始めたのは2002年からである。その後今日まで、かれこれ15年かけてオーストラリアには約30回渡航し、調査地は全6州と1準州、および首都特別地域にまたがり、都市から農村部、海岸部から砂漠の奥地まであちこち出かけてきた。オーストラリアの滞在期間は、すべて合わせればほぼ3年になる。

研究内容のシフト

もともと私は都市地理学を専門としており、日本の都市を対象に、どのようなインパクトが加われば都市のビルの高層化が進むのかという点に興味をもって研究してきた。地理学者として得意な外国のフィールドをもちたいという憧れを大学院生の

メルボルン郊外ヤラバレーのワイナリー（2016年9月）。軽めのランチをとりながら自分好みのワインを探すワイナリーめぐりが人気を集めている。

頃から持っていたので、研究機関に奉職できたことを機に、遅ればせながら30歳を過ぎた頃にオーストラリアに飛びこんだ。最初はシドニーやメルボルンなどの大都市を対象に、日本で研究していたようなビルの高層化を足がかりに、ウォーターフロント開発やコンドミニアムの建設ラッシュなどに興味をもっていくつか論文を書いていくうちに、絶えずやってくる大量の移民と、結果として出来上がる多文化社会に徐々に興味シフトしていった。折しも、高校地理の教科書（地理A）でオーストラリアの項目を執筆する機会を得たこともあって、都市だけではなく、オーストラリア全体について詳しくなりたいという気持ちが強くなった。長くなるので詳細は割愛するが、オーストラリアに渡航した際には、主な用務地以外の「寄り道」を行き帰りに盛り込むように心がけてきた。都市部と農村部、比較的雨が多い豊かな土地と過酷な乾燥地、現代オーストラリアの都市社会と伝統的な農村社会といったコントラストがたいへん面白い。次回はどこに行こうかなど考えながら、毎回帰国の途につくのが「日課」になっている。

オーストラリアの特徴

何度もオーストラリアに通ううちに漠然と抱くようになったオーストラリアの特徴やイメージは、オーストラリアに残る「ヨーロッパ的な要素」ではないかと思う。

もともとのイギリス的な文化は、オーストラリア社会の随所に残存している。典型的なものは、やはり羊だろう。シドニーやメルボルンなどの大都市から車を小一時間走らせると、農村部で最初に目に入る土地利用は果樹や野菜の栽培と牧羊のための牧草地である。牧草地には酪農用の乳牛が飼われており、そこから車をさらに郊外に走らせると、必ずと言ってよいほどブドウ畑が広がっている。家族経営を中心とした小規模なワイナリーが点在するエリアを抜けると、その先は小麦の栽培地域と再び羊の放牧地である。ここまで来れば、パン、ジャム、乳製品、そしてワインの原料がすべて揃う。このように、都市から農村にかけて広が



(下)メルボルン市内のカフェ(2014年2月)。少しでも椅子を並べるスペースがあれば、そこはオープンカフェになるのがメルボルンのカフェ文化である。



(右)エスニック・レストランの建ち並ぶメルボルン市内(2015年8月)。観光客が多く訪れるスワンストン・ストリートには、アジア各国の料理を出すレストランが集中している。



シドニー市内のショッピングストリート(2015年9月)。成長著しいシドニー市内では、新しいデザインの建物がどんどん増えている。

る「一連のセット」は、イギリスからの入植者がオーストラリアの地で自給自足するために、本国のイギリスの生活様式を持ち込んだものである。地平線まで続く牧草地に羊が放牧され、そこで羊たちがのんびりと草を食む様子は典型的なオーストラリアの景観である。しかし、これはイギリスからの入植者が、本国の生活様式をオーストラリアにそっくり持ち込んで「移植」したにすぎない。これはオーストラリア的なのではなく、イギリス的だと言った方がわかりやすいのだろう(ブドウ畑だけはイギリス的ではないが…)。

オーストラリアの牛肉(オーギービーフ)はとても有名であり、オーストラリアで何の肉が一番好きかと質問すれば、多くの人が「牛肉」と答えるだろう。しかし、実際には羊肉であるラムの人気の根強い。この傾向は、一族が1960年代以前に入植したイギリスやアイルランドから

の移民に強く見てとれる。オーストラリアのフィールドでの調査時に家庭での食事に招かれる機会もあるが、そこで出てくる「ごちそう」料理は、多くの場合オープンで焼いたラム肉の香草焼きである。オーストラリア国内で飼育されている羊の頭数は、冒頭に書いた通り7000万頭程である(2015年)。しかし、私が大学生の時代に覚えた数字では1億6000万頭程(1990年代初頭)だった。1990年代初頭のオーストラリアという国は、人口1600万人に対して10倍の数の羊がいるのだと驚いた記憶がある。当時は確かに「羊の背中に乗った国」という表現が適切だったかもしれないが、今や羊の頭数はだいぶ減ってしまっている。農業生産額に占める羊毛の比率も、最盛期だった1960年代には60%を超えていたが、今日では5%を切っている。もはや、羊の存在感はだいぶ減ったのかと思いきや、こうした食文化の

面に根強く残っていることは面白い。余談だが、オーストラリア社会の多文化化が進み、インド系の移民や、インドネシア、マレーシア、さらには中東諸国からのイスラム移民が増えた結果、宗教的な禁忌の少ないラム肉は、オーストラリア社会の中で重要度を増しているとも言える。

レストランからみる オーストラリアの多文化社会

シドニーやメルボルンをはじめ、オーストラリアには人口100万人を超す大都市が5つある。こうした大大都市の都心部には高層ビルが建ち並び、街角のあちこちにエスニックなレストランがある。エスニック・レストランの代表的なものはさまざまな中華系の店であるが、その他にもベトナム系、タイ系、インドネシア系、マレーシア系、韓国系などアジア系の店のほか、ピザ・パスタを扱うイタリア系、スプラキ(肉の串焼き)や肉厚ステーキを出す地中海系、ケバブを出す中東系の店も多くみかける。ただ、これは大都市部に限った話である。大都市部から50kmも離れると(つまり、オーストラリアの大部分では)、食事がとれる場所といえば、国道沿いに点在するファストフード系のほかはサンドイッチ屋かパン屋しかないことが普通である。私は公共交通機関でアクセスできない奥地に調査に入るためにオーストラリア国内をレンタカーで移動することも多いが、都市部から農村部に出てしまった後は、移動中の食事の選択肢は殆どない。

オーストラリアの大部分を占める広大な農村地帯には、アジア系の移民や店はほとんど見かけない。今日の大都市部にはアジア諸国からの移民が多くあふれ、食べ物の選択肢も多い状況に比べると、農村部は、まるで別世界である。

現代オーストラリアの印象

オーストラリアに行ったことのない人がオーストラリアに対して持っているイメージは、陽気でフレンドリーな人柄、広大な国土、有袋類などの野生動物、農業大国、資源国などである。日本から初めてオーストラリアに来た人は、石造りやレンガ造りの建物の多さから「ヨーロッパ的」な印象をもつ。しかし、ヨーロッパの都市を見たことがある人の場合は、ヨーロッパ的な要素がベースであることに異論は挟まないものの、何か「ちょっと違う」印象をもつだろう。それは、高層かつ現代的なデザインの新しいビルが都市(とくに都心部)に多い点が影響しているだろう。今も市内をトラム(路面電車)がゴトゴト走るメルボルンはヨーロッパの街並みに近い印象があるが、かつては存在したトラムを全廃したシドニーなどは、まるでアメリカの大都市にいるかのようだ(観光客用のトラムが1路線のみ存在するが)。さらに、都市部ではあちこちで見かけるアジア系のレストランの多さは、多文化社会のイメージに拍車をかける。ヨーロッパをベースに、アメリカとアジアがミックスされているのがオーストラリアの景観なのだろう。